秋興

但陰生野連

あさむさき梢の中やわたる鴫　曙耕

奥あるや霧のなかより川なり　梅父

秋の川やいよいよあをき峯の松　保泉

大日枝の雲のちぎれや引板の音　文眠

ひと朝の秋かま木に風を見せけり　青鳥

しら露をうめく世古ほれ菴跡かな　如柳

風さへ川くさはらく動くうきくされ　如蓬

霧はれて薬のにほふみやこかな　素溪

秋すでにわまとく沢め年月の覚えかな　仙賀

小夜ふけて蒲団出しにくきかな　竹亭

月斜め川にすまきあふ麻の夢　是笠

はし里種をかうへ家秋の白数かれ　歩丈

盆をとる子ゆゑの世ゝの月夜かな　荷月

盆哉やおかしきとしぐれになり　信刕 長砂

ある秋の一夜あれくれく痩になり　花旋

かちう子年虫く見せる鳴子かれ　旋竹

とゆむしや一本ほくに明の月　素弓

月落ちく虫の世界となりにけり　桑丈

末ろうゑの秋のまゝしくく露しぐれ　貞彦

ことしも三十とせを経て
皓氏先生再會し蕉風
骨法のことどもおよび夢
ある所をわすれ侍りて
荻のあらし身をかん

秋乃夜もかゝるに足らん一堂し　竹也

みるとせありて先生
知己の友ときゝ懐旧哉
説行にそを俳諧の流行を
聞きまゝ今は蕉門の要旨を例の
愈實の月在より理屈をはなれ
風雅の道理有あらん
先哲のまねしへにかゝる
侍るなり

一夜ちかひおかし秋の月　停雲舎 雅重